

PHOTO REPORT



皆伐された源流部。
シマフクロウが生きられる場がまた一つ失
われてしまった。

高低差のほとんどない根釧地方の川。この川は河口から最上流部まで砂防ダムなどの人工物はない。牧場が広がっているため、所々に橋が架けられているだけである。人の生活圏にあって森も川も大きな変化もなく残っているのは、奇跡に近いといってもいいくらいだ。平地をゆつくり蛇行して流れる川には、サケ、マスをはじめウグイ、アマススの大群が押し寄せてくる。河岸は湿地となる所が多く徐々にハンノキ、ハルニレなどの広葉樹の森となり、河岸段丘からはミズナラ、ダケカンバが目立ちはじめ、やがてトナリ主体の混交林となる。下流域は人家も多くあるが、森は途切れることなく広がりをみせている。そこには多くの野生生物が生息している。以前訪れた国後島のシマフクロウ

森と川と野生生物たち



少なくなった広葉樹の森を生活の場にするシマフクロウのつがい(左側・雄、右側・雌)

の生息地とオーバーラップする。森林の豊かさと広がりには比べものにならないが、北海道の平野部にも自然が残されていたのだと実感した。でも老人は語った。「昔は昼なお暗きミズナラの森が遠々とあったものだ」と。しかし、ここまで自然が残されたのは、林業と漁業の町であつたからではないだろうか。この光景はこの先も消えることなく残したいものである。

自然の再生を信じて

環境の悪化は森から始まる。近年、大規模な伐採は影を潜めたが、小範囲の伐採(皆伐)は今なお行われている。それは、偶然なのか源流部で行われることが多い。正直なところこういつた所が残っていないとも言える。川の一番の元が壊されると、平地の弱みで、河川、海と順々に侵されていく。やはり個人個人の意識の向上が大切である。

アイヌの人々もそうであつたように、これは人のため、あれは動物のために残していく気持ちが必要だろう。長い目でみれば自然は再生してくれる。限度さえ超えなければ、シマフクロウもそうである。今行っている環境省の増殖事業は、いずれもっと多くの自然が回復し、人の手を借りずに種が存続できる日までのつなぎに過ぎない。いつか本当の自然に生きるシマフクロウの姿が見られることを信じて。

シマフクロウの聖地

「自然写真家からのメッセージ」 写真・文 **山本純郎**



やまもと すみお
シマフクロウ研究家。1950年京都府宮津市に生まれる。少年時代にフクロウと出会い、京都市動物園、守口市などで公務員をしながらフクロウを観察。82年模室市に移住し、シマフクロウの保護・増殖活動が続いている。環境省の自然保護委員。主な著書に「シマフクロウ」(北海道新聞社)、「しまふくろう」(福音館書店)などがある。